大川の職人集団を新しい形で復活させるために

FDY家具デザイン研究所
山永 耕平 さん（大川家具職人塾 講師）

大川市において、伝統を活かした付加価値のあるモノづくりの技術承継を目指し、若手後継者、若手職人を育成する目的で行ってきた『大川家具職人塾』も、今年度で3年目となりました。今回は講師として塾生に技術指導を行いながら、ご自身もデザイナーであり宗像市で家具工房を営んでおられる山永耕平さんに、大川市との関わりなど、様々なお話を伺いました。

大川家具職人塾

大川での職人としての修業時代～現在まで

「私と大川との関わりは、半世紀前になります。当時、私は佐賀大学教育学部で美術系学科の学生でした。自分に何が向いているのか、絵画・染色・金工などいろいろ体験し模索をする中で出逢った『木工』に一番心を打たれました。隣には家具の街・大川市があり、これが自分の一生をかけてやれる・やるべき分野であると確信しました。

工芸、木工を専攻し、卒業間際になってから、このまま卒業してよいものか迷い始め、進路を決めあぐねていた際、当時非常勤で木工の授業を担当されていた大山繁三郎先生にお会いする機会があり、木工の現場で実体験をしたいと伝えたところ、大川の家具メーカーを紹介していただきました。その頃の大川には家具職人と呼ばれる本当の職人が多く残っていた時代でした。厳しい従弟制度が色濃く残っていた頃に、私は学卒の身で職人の世界に飛び込み、色々なことを学ばせていただきました。会社では職人を目指しみっちりと修行させていただく覚悟でしたが、会社側はデザイナーとして採用をしたつもりだったようでした。私は現場にこだわり、1年でカンナの刃が無くなるぐらいに仕事をこなし、夜は残業で家具作りをさせていただきました。また、大学時代の恩師である大山先生からは、デザイン教育に木材加工は欠くことができない授業であると、技術の習得に励んでいた私をかねてより大学へ誘っていただいておりました。クラフトという言葉が流行語になっていく頃で、3年間は職人の修行をすると決めていたのですが、先生の強い勧めによって、木工の現場から教育の現場として九州産業大学のデザイン学科

ウィンザーチェアの確認

インテリアデザインコースへ助手として赴任することになったのです。

大学に勤めだして1、2年後に、お世話になっていた家具メーカーに挨拶に伺ったことがありましたが、工場の現場に女性がいるのにはおどろきました。私がいた頃は現場に女性がいるなど、とんでもない時代でした。わずか1～2年の間のことでしたが、大川も大きなホテルの家具を受注していた頃でしたので、機械の導入とともに工場の環境が大きく変わっていました。

昭和62年から平成20年まで、「明日のために新製品開発コンテスト」や「華胥の夢博」、「全国高等学校インテリアデザイン展」などの審査員を歴任させていただき、大川の家具デザインの変遷を垣間見ることになり、平成27年度より「大川家具職人塾」の講師をお引き受けすることとなりました」

平成27年度より大川インテリア研究所に場所を提供していただき、職人復活の名のもとに実証実験的に開塾。平成28年度は、『より職人に近い人材を育てたい』という目的で木工経験のある方を対象にし、カップボードを製作。大川商工会議所の総会、木工まつりで展示も行い高評価を得ました。そして、平成29年度は、『箱モノから脚モノへ技術の幅を広げたい』という塾生の強い要望を叶えるべく、山永さんの研究テーマである『ウィンザーチェア※』の製作を行っています。

道具を通して木と対話をすること

高度な機械加工が可能となり大量生産に成功し、インテリアの街として発展してきた大川の家具業界ですが、安価な海外製品の増加や市場規模の縮小等により低迷が続いております。一方で鍛えられ磨かれた手加工による家具づくりを行う職人が少なくなりつつあり、『手』の技術の承継やその人材育成の重要性が求められております。そのような中、大川家具職人塾のテーマである『手』の技術と機械加工の共存についてお尋ねしました。

「手によるモノづくりが消えていく危機感がありますが、手加工といっても全く機械を使わないということではなくて、機械に頼らないとできないところもあります。職人塾でも当然機械を使います。しかしそれは基本的な手加工を助けるための機械でなければなりません。機械の便利さをいちばん知っているのは職人であり、機械を使えるのも職人であります。ただ機械に頼りすぎることは自己否定でもあり、そもそも機械の利便性は過酷な労働を強いられた職人が求めたものでもあったのです。職人塾では、塾生本人たちにそれを体験してもらうよう指導をしています。日本本来のノコと鉋とノミを通して木と対話をする、木に学ぶことが基本にあっての機械でなければなりません。そういうことを理解し、体験してもらい、機械加工をする部分と手で作り上げていく部分を、職人として判断できるように育てていくことも、職人塾の目的や意味でもあります」

機械加工

大川家具職人塾の目指すところ

平成27年から続けてきた職人塾の中から若い芽が育ちつつあり、創業に向けて準備をされる方も出てきているようです。今後の大川家具職人塾に対する先生の思いをお聞きしました。

「今の大川の家具にかぎったことではありませんが、インターナショナルとなった日本の家具産業ではありますが、一方では昔どこにでもあった和風の家具が姿を消してしまっています。この大川家具職人塾の事業は、いまの大川市だからこそ出来るものです。職人塾の塾生に期待していることは、木工の加工技術を伝え覚えてもらうことだけを目的としてはいません。家具を作るだけではなく、日本独自のデザインを生み出すようになること。そのために出来るだけ国産の木を使うことにしています。それができてこそ、マイスターと呼ばれる存在になりえます。日本の加工技術には外国には真似できないものがあります。日本の道具と木材から生まれる新しい【和】のイメージ、日本の家具を想起させるモノづくりを、大川家具職人塾から国内・海外へ発信をしていく。本来であれば大川の家具産業の最盛期にこそ職人を育てる機関が必要であったのですが、今となってはこの職人塾自らが企業にアドバイスできる、デザインを提供できるような存在になって欲しいです。『大川家具職人塾』の卒業生が大川の企業に貢献できるためにも職人塾の事業内容に賛同し、将来に向けて職人塾のサポートをやってもらえる多くの企業が大川市から出てくることを願っています。

鉋がけ

また、3年目を迎えて一定以上の技術を身につけた塾生が出てきておりますので、今後は彼らが職人塾を卒業して、家具産業にかかわりながら、新たに入ってくる塾生を教えるという昔大川にあった職人集団が新しい形で復活する。否、すでに復活しつつあります！そういう循環ができてくれることを期待しています」

JAPANブランド『大川家具』を作る――新しい日本の『和』、30年前にはあったとされる日本の『手』の技術を体現したモノづくりをする『大川家具職人塾』の今後の事業活動にぜひ注目していただきたいと思います。

※ウィンザーチェア…17世紀後半からイギリスで製作されはじめた椅子で、ガーデンチェアとして当時の王侯貴族に使われていた。